

出荷前県産牛 全頭検査の状況を公開

出荷前の県産牛の全頭検査を進める県が放射性物質検査を委託する山形市の日本環境科学(稲毛重之社長)で3日、検査状況が報道陣に公開された。

同社の職員がまず、検体として持ち込まれた牛肉を細かく裁断し専用容器に入れる。別室の検査室にそれ

を移し、検査員が放射性物質を測定する「ゲルマニウム半導体検出器」にかけて調べる。1検体に付き1時間程度を要する。

同社は7月19日に検出器2台を導入。県産農畜産物などの検査を担っている同市の県衛生研究所が使用する機器と同水準の検査能力

を持つ。同25日の全頭検査開始から2台を稼働させており、1日20〜30検体の検査を続けている。県は他に同市の県理化学分析センターにも県産牛肉の検査を委託している。

県産牛、安全確認

出荷前54頭

県は3日、出荷前の県産牛54頭の放射性物質検査を行った結果、放射性セシウムは国の暫定基準値(1キロ当たり500ベクレル)を下回るか、不検出だったと発表した。

54頭は山形、米沢、長井、天童、南陽、河北、朝日、最上、鮭川、高島、川西、小国、白鷹、飯豊、遊佐の15市町の各農場で肥育された。うち8頭分から33〜0.6ベクレルの放射性セシウムを検出。46頭分は不検出だった。

出荷前の全頭検査は3日までに計311頭で実施、暫定基準を超えた値は検出されていない。



県産牛肉の放射性物質検査を行う日本環境科学の検査員。専用の容器に入れた牛肉をゲルマニウム半導体検出器(右)にかけて測定する =山形市高木